

「サロメーすり替えられた願い」・登場人物

サロメ	母ヘロディアの再婚により連れ子としてローマ帝国支配下のユダヤ領主の娘となる。母親や義理の父親の前では大人しい従順な娘を装っているが、本音は不満でいっぱい。家来たちが相手の時は高慢な態度で言いたいことを言う。
ヘロディアス	サロメの母親。昔は美貌で今は魔術で欲しいものを手に入れてきた。自分の威力を維持することに喜びと生きがいを感じる。ヘロデとの再婚を非難されたことからヨカナーンを憎む。
ヘロデ	王と呼ばれているが本当は、ローマから任命された領主に過ぎない。
ヨカナーン	悔い改めを説く預言者。人々から信頼されて人気があるので聖職者たちから妬まれている。ヘロディアスに恨まれ牢屋に入れられた。

小姓

護衛長

聖職者 1, 2, 3, 4、

番兵 1, 2, 3

酌女 1, 2, 3, 4, 5、

ヘロディアスの召使い

ローマ人 将校

ローマ人 将校の家来たち

あらすじ

宮殿の宴会の夜、王女サロメは、母親の再婚相手の王様の大切な客であるローマ将校の前で舞いを踊るよう言われていた。気ののらないサロメは、宴会を抜け出し、庭を散歩し、庭の井戸の中に閉じ込められた囚人と話をする。サロメは、この囚人を解放することを条件にするのなら、酔った客たちの前で舞を見せてもいいと考えた。狙い通りヘロデはなんでも欲しいものを与えるというが、サロメの願いは母親に妨げられ、

歪曲され、助けたかった囚人は母の命令で殺されてしまう。サロメは母親と対決し、城を出て行く。

1. 第1幕 城壁の外

第一場

月の明るい夜、松明の灯り。

聖職者たちは正装し手に書物を持ち揃って歩いてくる。

聖職者 1 「さあ今日も私たちの夕べの祈りをここで捧げましょう」

聖職者 2 「私たちの誠実な友、ヨカナーンをどうか解放して下さい」

(本を開きそれぞれが祈りの言葉をつぶやく)

聖職者 5 (ひそひそ声で) 「すみません。私はこの礼拝に参加するのは初めてなのですが、教えて下さい。あの男は私たちの教えに逆らうようなこと言って回る男で神殿にお参りもお布施も必要ないだなんて教えて回っている要注意人物だというのに、何故こうしてわたしたち神殿に仕える者が集まって彼のために祈っているのでしょうか？」

聖職者 4 「誰も恐れて言えないことを王様に言ったからなのですよ。」

(耳元で) の事です

聖職者 5 「ああ…のことですか、…のことならわたしも…祭祀様から何故真っ先にご意見されないのかと思っていました。」

聖職者 4 「それで彼を助けようということなのです」

聖職者 3 「あの男を助けるとは誰も言っていませんよ。あの男を助けるとは誰も言っていませんよ。しかし、あの男の批判は指示する。異母兄弟同士の結婚だなどと。いくらローマ皇帝から任命された領主であっても、私たちの法律を無視することには抗議します。」

聖職者 2 「その通りです。近親結婚が私たちにとってどんなに重大な罪であることか」

聖職者 1 「この世の禍いは全て、律法に従わないことに始まる。見よ、今のこの世の中を。宮殿に招かれるのは祭祀でなくて異国人だ。そ

もそもヘロデは王になるべき血筋ではない。ダビデの血を引く私たちの王が現れるのだ。その時が来るのを私たちは待ち続けようではないか。さあ、皆さん、今夜はもう引き上げましょう。また明日の夜も、ここで祈りを捧げましょう」

(一同、互いに恭しく礼をして退場)

第二場 城壁の中

見回りの番兵1, 2, 3, が槍を片手に列になって歩いてくる。

舞台真中に井戸がある。

番兵1 「今夜はもう引き上げるようだな。」

番兵2 「やれやれ。毎晩毎晩、あいつらの礼拝を聞かされるのはうんざりだ。いくら礼拝を聞かせても王様に聞く耳などあるものか。あの地下牢の男が解放されるまでやるんだろう。」

番兵3 「解放されるといい。あんな人は滅多にいるもんじゃない。俺だってあの方が解放されたら、清めてもらいたいんだ。」

番兵2 「へっ。あの男は、ガラテヤの辺鄙な山の中の川で清めれば、お布施なんか払わなくても救われると説いているからな。」

番兵1 「でもまあ、無理だろう。王様の権力に逆らったのだから。」

番兵2 「神殿の奴らだって、本気であの男を牢屋から出そうとなんて思っていないのさ。民衆の人气が欲しくて建前上やってるだけだ。王様があの男を処刑してくれた方がいいのだ。」

(ヨカナーンの声) 「悔い改めよ。天の御国は近づいた」

番兵3 「おや、あれはあの方の声ではないのか。」

番兵2 「いや、そうだ。はっきりわかるな。今夜は大切なお客様がいるので、城の中の地下牢から井戸の中に移せという命令だったが。」

番兵1 「まずいな。客室に聞こえるな。宴会が終わる前になんとかしなければ。」

番兵 3 「護衛長様に報告だ。」

番兵 1 (残念そうに) 「護衛長様は王様に呼ばれた。宴会の席に居るの
だろう。」

番兵 3 「お客様滞在中は、厳重に警備するようにとっておきなが
ら、護衛長様は宴会か。」

番兵 2 「知った風なことを言わなくていい。ローマのお客様から勧めら
れたら護衛長様だって断れる筈がない。」

番兵 1 「民族衣装を着て酌をするのだ。ローマ人は女よりも男に酌され
る方が喜ぶそう。ナラポートがクビにされて、新しい小姓じ
ゃあまだ任せられないからと、お妃様が直々に言いつけたの
だ。」

番兵 3 「分からん。そんなものは女の仕事じゃないか。敵が来たらどう
するんだ。」

番兵 1 「あちらの流儀だそう。ともかく、今はお伺いすることが出来
ない。」

番兵 2 「そう。いいものがある。」 (猿轡を出す)

番兵 3 「信じられん。そんなものまで必要なのか。」

番兵 2 「違う。ここで大声だされちゃ、客にでも聞こえたら俺たちの方
が大丈夫じゃない。」

番兵 1 「ちょっと待て。あいつは、預言者エリアの再来といわれている
男だから。雨や炎を使うかもしれない。逃げられたりしたら大
変だ。引き上げてはだめだ。」

番兵 3 「あの方は逃げるなんて卑怯なこととは思わないと思うが。」

番兵 2 「俺はイナゴのにおいが苦手だ。あいつは荒野でいつもイナゴを
食べてたらい。」

番兵 1 「俺はあの目つきが不気味だ。」
(番兵 1、2、番兵 3 を見る)

番兵 2 「お前、ガラテヤの出身だったな。」

番兵3 「はい、イナゴずっと食ってませんが。」

番兵2 「そうか。じゃあ頼む」 (番兵3に猿轡を手渡す)

番兵3 「はあ。こんなもので縛らなくても、話せばわかる方だと思いきが…命令ならばやりますが。」

番兵1、2 (重い鉄の蓋を取り除き、番兵3は綱に捕まる)

番兵1、2 「よし、ゆっくり下ろせ。そっと。そっと。」

(踏ん張って滑車のついた縄を引くと、番兵3が下へ降り、代わりにヨカナーンが上がってくる。そのキラキラ光る目をみてびっくりした二人が手を放すと、ヨカナーンが下がり、番兵3は放り出される。)

番兵1 「出来ないな。仕方がない。(番兵2に) 今度はお前が降りろ (番兵3に) お前はここで準備しろ。俺たちが引っ張る。上がってきたら猿轡を付けるのだ。」

番兵2 「えっわたしが降りるんですか？暗いしなあ。」

番兵1 「ちょっとの間だけじゃないか。」

番兵2 「そうだ、厚めの手袋探してくる。錆たチェーンで、手を怪我するといけないから。」

番兵3 「大丈夫です。怪我するほどではありませんよ。」

番兵2 「手が滑って落ちたらどうするんだ！」

番兵1 「じゃあお前が、やつに猿轡を付けるか？ あいつの顔に近づくぐらいなら井戸に入る方がいいだろ。」

番兵3 「ほんの少しの間です。手早くやりますから。」

番兵2 「…ともかく手袋を取ってくるよ。」

番兵3 「じゃあ、これ使ってください。」

番兵2 「な、なんだ、最初っからあるっていいよ。」

(パントマイム) 番兵2は降りるのをためらい、番兵1がやらせようと説得、番兵3は猿轡をいじっている)

第三場

サロメ、後から小姓が歩いてくる。

小姓 「王女様。そろそろ宴会へ戻りましょう。護衛長様は、庭の散歩はお許しになりましたが井戸の方にはお連れしないようにとおっしゃいました。」

サロメ 「そう言われると余計に行ってみたくなるのよ。この城では誰もが人の目を盗んで好き勝手なことをしているわ。わたくしだけに言いつけを守らせようなんて出来ないわ。」

小姓 「どうかお戻り下さい。わたくしが、護衛長様に叱られますから。」

サロメ 「大丈夫、わたくしが護衛長にはあなたを叱らないように言いつけますから。」

小姓 「そうは言いますけれども王女様。王様もお客様もあなた様をお待ちでございます。せっかくお許しを頂いたというのに、戻らないようでは、王様の顔が立ちません。」

サロメ 「ナラポートは、もう少し融通を効かせてくれたわ。」

小姓 「ナラポートはもう辞めましたので。」

サロメ 「ヘロディア様が辞めさせたのよ。」

小姓 「お妃様からは同じ過ちを犯さないようにと言われていました。」

サロメ 「分かってないねお前。このまま、わたしが城の外に逃げ出してしまったとしても、お前はわたしを守る責任があるのだよ。」

小姓 「まさかそんな王女様。お願いでございます。ご冗談を。」

サロメ 「冗談ではない。今夜は月が美しいこと。銀の花のようだよ。灯火の無い、城の外堀を侍女のショールを付けて、真っ暗な道を歩

いてって、森の中で灯りもつけず木の根っこで寝たならどんな
んでしょう。ああ、可哀想な王女様。

そうしたら、お前はこう言うのよ「酔っぱらいの前で踊れだ
なんて強制されたおかげで、気がふれてしまった、王様の傍らに
侍っている酌女と同じ事で競わせられることが王女としてのプ
ライドを傷つけられて、生きることに絶望したのだ、そう思う
と。」

小姓 「ご想像が過ぎます。姫様にはただの気まぐれやいたずらのつも
りでも、そんなことになろうものなら、証言の機会も与えられる
ことなく、わたくしの首が飛びます。

貴方様にはどうでもいいことなのかもしれませんが、どうかお願
いです、いたずらでそんなことをするのは止めて下さい。」

サロメ 「あははははは。心配しなくっていいわ。今宵は、あの護衛長ま
で、酒を飲まされている。ローマ人からすすめられたら、何だっ
て断ってはいけないのだから言っているから、王女が居なくな
っても仕方がないのよ。私に何があってもお前のせいには出来な
いはずよ。」

小姓 「王女様は、ローマ人たちの前で踊るのが嫌なのですね。でも、
どうか自信を持って下さい。」

サロメ 「お前の言葉などわたしには何でもないわ。」

小姓 「お美しい貴方が舞う姿は夢のようにお美しいことでしょう」

サロメ 「王様には国中から集めた一流の酌女たちが沢山いるというのに
何故私がおどらなければならないのかしら。」

小姓 「貴方様は座っていらっしゃるだけでも清らかでお美しい。踊っ
ている姿をみてさらにあなたの美しさや清さを確信したいという
のが殿方の欲望でございます。」

サロメ 「がっかりするわ。全く、尊厳もへったくれもないこと。野次
を飛ばすわ、酔っぱらいは。」

小姓 「戦地で手柄を立てる方こそ、酒の席では豪快だといいます。」

サロメ 「そんな男に媚びを売って生きなければならない。女の宿命よ。母をみればわかるわ。生まれてこなければよかったのに。」

小姓 …

(ヨカナーンの声) 「悔い改めよ。天の御国は近づいた」

サロメ 「何か声がするわ。」

小姓 「ああ、もしかして・・・だから護衛長様が井戸の方には近寄るなどおっしゃったのです。あの穴には、牢獄から移された四人が入っているのです。」

小姓 「もう宴会の席へ戻りましょう。何事かと尋ねられる前に。」

サロメ 「番兵が居るわ。逃がそうとしているわ。」

小姓 「まさか、番兵が。」

サロメ 「危ないわ。わたしはここに隠れて見張っているから、護衛長を呼んで来て。急いで」

小姓 「でも、王女様。」

サロメ 「わたしはここから離れられやしないわ。護衛長が迎えに来てくれるなら、宴会の場へ戻りますと伝えて。急いで。」

小姓 「わ、わたくしひとりでも何とかいたします。」

サロメ 「でもやっぱり、護衛長を呼んできたほうがいいわ。」

小姓 「わたくしひとりでは何もできないと。」

サロメ 「そんなことは言っていないわ。でもあなたは兵隊の訓練をうけていないのだし、こういう時は助けを求める方がいいわ。」

小姓 「王女様がそうおっしゃるなら。わかりました。必ず、隠れていてください、直ぐに戻りますから。」 (去る)

第四場

再び井戸の周りの番兵にスポットライト。

(番兵1、3、が、荒縄を木にかけて、井戸の中に垂らすと、番兵2が井戸の中に降ろされると同時に、手足を縛られた真っ黒い人影が上がってくる。)

(サロメ、物陰からみている)

サロメ 「この人がヨカナーンね。」

番兵1 (気が付いて) 「これは王女様。」

サロメ 「逃がしてもよいの？」

番兵1 「逃がそうとしているではありません。煩いので、猿轡をかませようと。お客様に聞こえてはまずいので。お見苦しいものをお見せしてしまい申し訳ございません。すぐに降ろしますから」

サロメ 「かまわない。猿轡をかけるのは、待ちなさい。」

番兵1 「王女様の仰せとあれば」 (番兵3に) 「待て。」

(ヨカナーンの声) 「悔い改めよ。天の御国は近づいた」

サロメ 「あなたは地下の牢獄からいつも聞こえていた。」

(ヨカナーンがサロメの方を見る)

ヨカナーン 「ヘロディアの娘。悔い改めて荒野へ行けよ。血筋によらず、肉の欲に拠らず、人の欲にもよらず、ただ、神によって生まれることだ。」

サロメ 「どうしてわたしが、ヘロディアの娘と分かったの？ああその通りです。血筋、肉欲、人の欲、なんと憎いことでしょう。」

ヨカナーン 「罪の娘よ。覆いで顔を隠して、粗末な布で頭を覆い、荒野へ行け。悔い改める者は全て受け入れられる。」

サロメ 「わたしは知っています。城の壁の外には、私をそしる人々が待ち構えていること。」

ヨカナーン 「顔を隠して荒野へ行き、人の子に会うのだ。その方は今、ガレリアの湖上で人々に教えていらっしゃる。その方はお前の汚れた血筋のことを咎めたりはしない。全てを贖い、平安を与え、お前を救ってくれるだろう」

サロメ 「あなたはすぐにも井戸の中で死ぬ運命にあるというのに、わたしのことを気にかけて下さっているのね。わたしに頼めば、あなたを自由にする事だってできるというのに、あなたは、猿ぐつわをかけられて井戸の中に閉じ込められようとしているのに、命乞いをするどころか、わたしを救おうなどとおっしゃる。」

ヨカナーン 「放埒の娘よ。謀は無用だ。」

サロメ 「わたしにあなたの命を救わせて下さい。これから私は、王様前で踊ることになっています。さっきまでわたしは、この国の半分でもやると言われても何も欲しいものなどなかった。何故この私が酔っぱらいの異国人たちの前で踊りを見せなければならぬのか、自分の運命を呪っていた。でもたった今、決めました。私の望みはあなたを救うことです。」

ヨカナーン （目を閉じる）人間の権威など役にはたたぬ。荒野へ行け。神の言葉だけが滅びることはない。お前は、汚らわしい道に踏み迷わぬように。滅ぼされる権威により頼まず、滅ぼされぬ権威により頼むことだ。」

サロメ 王女の地位にかけて誓います。

（護衛長と小姓が入ってくる。）

番兵1 「まずいぞ。もう待てない。早くやろう。」

護衛長 「一体何をしているのだ。決して出してはいけないと言ってあったはずだ。」

番兵1 「申し訳ございません。うるさいものですから、猿ぐつわをかませようと。（番兵3に）おい、まだか早くしろ。」

(番兵3は、急いでヨカナーンの口に猿轡をかけて、直ぐに引き下ろし、蓋をして、鍵をかける。)

護衛長 王女様。大丈夫ですか。(小姓に)何と危ないところに王女様御一人を残したのだ。全く。

サロメ あなたこそ、宴会で何をしていたの？赤い顔をして。いくら何でも護衛長という立場にありながら、任務を放ったらかしにするだなんて。

護衛長 王様のご命令でなければわたくしとて。

サロメ わたくしの身に何もなかったらよかったようなものの。何かあったらどうやって責任をとるおつもり？(小姓に)行くわよ。

(護衛長、後から従う。)

番兵1 お可哀そうに護衛長様。

可愛らしいお姫様だと思っていたが、我が強い。さすが血筋だ。王様はサロメ様の言うことならきっと何でも聞くのだろう。

番兵3 あの方はわずかの間に姫様を悔い改めさせたのだ。

番兵1 気まぐれか同情で口にただけだろ。すぐに忘れちゃうさ。

番兵3 そんなものかな。

番兵1 そうだ。思い出した。あいつ何処だ？

番兵2 (うめき声)

(酌女 3, 4, 5、クスクスと笑う)

ヘロディアス 「礼儀を弁えない女たちであること。奴隷のくせに。」
「さあ、お前たち、踊りなさい。」

(酌女 3, 4, 5、立って踊る)

(ヘロディア、召使いに合図。召使、果物の皿を2つ捧げ、ひとつをヘロディアに、もう一つを酌女 2 に渡す)

(酌女 2、将校の隣に座り、果物を将校の口元に運ぶ。)

(ヘロディアスはヘロデの隣に座り、果物を夫の口元に運ぶ)

ヘロデ (やるせなく咀嚼し) 何だか今夜は気が浮かぬ。風が吹いている。風と一緒に大きい鳥の翼の音がする。

ヘロディアス 私には何もきこえませぬ。

ヘロデ もしやあの囚人の言う通りの事が起こるのやもしれぬ。あの者は、神を見た者だ。あの男は、本当に神の命を受けているのかもしれない。とにかく聖者だ。禍が下るのは本当か。

ヘロディアス あなた様ともあろうお方が何を恐れるかと思えば。
あの男のことなど取るに足らぬことです。

ヘロデ わしはだれをも恐れるということがない。(苦々しい顔で果物を咀嚼する)

(酌女たちの踊りが終わる)

ローマ将校 「さあ、次は国一番の美しい乙女の踊りの番ですかな。」

ヘロディアス 「ええ、でも何処へ行ったのやら。大切なお客様を放りだして。まだ子供ですの。」

ローマ将校 「何々。もう十分お美しい。」

ヘロディアス 「まあ、ローマの洗練された女性と比べたらなんと見劣りすることでしょう。」

ローマ人 「そこが宜しいのですよ。」

ヘロデ 「サロメ、サロメ、わしがお前に頼むから舞え、サロメ、俺のために舞え、」

ヘロディアス 「まあ、お客様の前で何と失礼な」

サロメ 「（出てきて）王様のお言いつけであれば喜んで。」

ヘロデ 「わしのために舞えば、欲しい物を何でもやろう。」

ヘロディアス （独り言）「まあなんと、お優しいお父上だこと。」

サロメ （顔を上げて）「私の願いならどんなことでも聞いてくださいますね。」

ヘロデ 「ああ、この国の半分でもお前にやろう。」

（サロメ、したりと微笑む）

ヘロディアス （独り言）「まあ、わたくしのためにそのような言葉かけて下さったことがあったかしら。」

サロメ 「誓って下さいますか。王様。」

ヘロデ 「おう、誓うぞ。サロメ。舞って見せい。」

ヘロディアス 「お止めなさい、サロメ。お前は、人様の前で舞ったことなど無いというのに。うまく舞えなければ笑い者になるのよ。恥ずかしがりやなのだから。」

サロメ 「今迄のサロメはそうでした。でも今夜は王様にどうしても叶えていただきたい願いがあります。」

ヘロデ 「叶えてやろう。叶えてやろう。この王冠にかけて。」

ヘロディアス (独り言) 「空言を。」

ローマ将校 「まあ、ここまで来てやらないわけにはいきませんでしょうな」

ヘロディアス (独り言) 「フン、勝手にするがいいわ。王冠、王冠、つまらぬ約束。」

(サロメ立つ)

第二場 音楽、サロメにスポットライト
自信を持って大胆に踊る

ローマ将校 「素晴らしい！とても初めて人前で踊ったとは思えぬ」

ヘロデ 「よしよし。何処に出しても恥ずかしくない娘だ。よく舞ったぞ。サロメ。来い、来い。褒美をやろう。何が欲しいか？」

サロメ (すぐに進み出て、ひざまずき) 「わたくしの欲しいものは尊く清い王様のご慈悲でございます。」

ヘロデ 「それは真珠か珊瑚か、お前には淡い色の宝石が似合うだろう。」

サロメ 「井戸の中に閉じ込められた囚人ヨカナーンを・・・」

(ヘロディアスが、口をはさむ)

ヘロディアス 「オホホ・・・流石はわたくしの娘よく言った。ヨカナーンの首を切れということでございます。わたくしがいつも申し上げていることでございます。」

サロメ 「お母さま、そうではありません・・・」

ヘロディア 「王様、あなたはお誓い事をなされました。この尊いお方の前で。」

サロメ 「王様私は…」

ヘロデ おれは確かに宣言した。俺の信ずる神々にかけて宣言した。しかしな、サロメ、何か他の品は無いのか。お客様の前で血を流すのはさすがによくない。

サロメ はい。ですから、わたくしが欲しいのは…

ローマ将校 わたくしのことでしたら別にお気になさらないで。ローマではわざわざ酒の席に血を流す見せ物を用意させることだってあるくらいですから。

ローマ家来たち (笑って、酒を酌み交わす) 「さあ、どうぞその男の首をみたいものです。」

ヘロディア 「娘がヨカナーンの首を望むのは、もっともなことでございます。あの男はわたしを侮辱することをやめません。娘がどれほど母を大切にぞんじているか、分かりましょう。」

サロメ 「お母さま。わたくしは。」

ヘロデ 「あの男を殺せば、民衆がまた騒ぎ出すだろう。
(小声で) たたりがあるかもしれん。」

ヘロディア 「だからこそ、王女がそれを求めるのがお分かりになりませんか？もうお客様たちの前で公言したも同じですわ。民衆を怖がっているなどとでも噂され、皇帝のお耳に入らないともかぎりません。」

サロメ (つぶやく) 「お母さまは、そうやっていつもわたくしの行く手を阻むのだけわ。」

ヘロディアス 「ローマの将校様の前ですよ、自分の身をわきまえなさい。」

ローマ将校 「どうぞ、私たちのことならお構いなく。
どれ、囚人をここへ連れて来るがいい。(刀を抜いて) どれ、
わたしが首を落としてやろう。」

(ローマ人家来たちのはやし立てる声に、サロメ、憤慨して出ていく。)

ヘロディアス 「ほれ、あなた様がすぐうん、と言わないから。」

ヘロデ王 「ええい。王女が欲しいというものを渡してやれ。だから、機嫌を直せと言ってやれ。」

(妃、夫の指にはめた死の指輪を抜き取り、兵卒に渡す)

兵卒、指輪を受け取り、直ぐに首切り役に渡す。

(サロメのすすり泣く声と、宴会の品のない笑い声)

3. 第三幕 ヘロディアスの呪文

暗闇。呪文のような声が低く聞こえている。青い光が銀の盆の上に置かれたヨカナーンの首、その背後の子牛の像を照らしている。ヘロディアスの顔が赤い光にゆくりと浮かび上がる。

ヘロディアス 「まったく。男というものは迂闊に、重大なことを決定するものだよ。だからこそ呪いの力が必要なのだ。悪いねえ、ヨカナン。目をお開きよ。臉をおあげよ。
腹立ちやらさげすみで恐ろしかったお前の目はもう瞑ってしまったのだね。あたしに毒を吐きかけたその赤い舌はもう動くこともないのだ。あたしの娘を騙して自由になろうなどとするからさ。さんざんあたしに憎々しいことを言って、あたしのたった一人の娘にまであたしを憎

むように仕向けるだなんてとんでもない聖者様よ。
そこまでされちゃあ、もう生かしておくわけにはいかなか
ったんだよ。自業自得だね。良い物も食わず、良い着
物も着ないで悔い改めていきても、やっぱり死ぬのは怖
かっただなんて。あくどいじゃないか。どうせ悪どいの
ならあたしのように生きた方がましなのさ。あたしは生
きてる。あんたは、死んでしまったのだよ。犬に投げて
やろうか、鳥の嘴に啜えさせようか。あたしの自由さ。
可らしいねえ。」

(サロメ、暗闇の中から現れる)

サロメ 「ちがうわ。その人はわたしに命乞いなどしなかつ
た。」

ヘロディアス 「何と言おうといいけれど、この男が殺されるのは決ま
っていたことなのよ。お前ひとりの感情でどうこう出来
る事じゃないのよ。」

サロメ 「王様はあなたでなくて、私に約束したのよ。」

ヘロディアス 「急にへそを曲げて出て行ってくせに、文句を言えたも
のじゃないでしょ。」

サロメ 「客の前で逆らうなど言ったのはあなたでしょ。」

ヘロディアス 「どうせ殺されることになっていたのです。」

サロメ 「わたしはこの人を救いたかった。あなたは、自分の娘
まで、自分の都合のいいように利用するのかわ。」

ヘロディアス 「なんてことを言う娘でしょう。何もかもあなたのため
にやってきたというのに。」

サロメ 「うそよ。あなたはいつも誰かのせいにするけれど、結
局は、自分の思うがまま、にしたくってそうするだけな
んだわ。忌まわしいのはあなたよ。」

ヘロディアス 「忌まわしいのはあの男よ。いい？あたしはね。もう何
人もの占師に見てもらったの。王様が城に居つかず、新
しい城の建築ばかり気にかけるのも、全てあの男が悪か

ったのよ。あの男があたしの悪口を言って歩くものだから、口煩い民衆たちは、まるであたしをよく知っているかのように、なんでも忌まわしいことがあれば何でもあたしのせいにしてしようとする。全てあの男のせいなのだよ。」

サロメ 「それで、この人の首を銀の盆に載せて飾ったら気が済みましたか？フィリッポス王の死、お父様の死は本当は誰のせいなのですか？」

ヘロディアス 「なんて生意気な口をきくようになったの？あたしのせいだとも言いたいのかい？少しぐらい王様に褒められたからって調子にのるんじゃないのよ。」

(サロメの頬をたたく。何度もたたこうとする。)

サロメ 「調子になどのつてはいません。」

ヘロディアス 「あたしに指図するなら、この城から出てお行き！」

サロメ 「この体中にあなたの血が流れていると思うと生きているのさえ嫌で仕方ない。脅されたって何だっかまわらない。出ていきます。」

(飾ってあった子牛の像を床に叩きつけ、去る)

ヘロディアス 「何て恩知らず。思いあがるんじゃないわ。誰のおかげで王女でいられると思っているのよ。あたしの努力のおかげよ。自分だけが利口だと思い込んでいるから始末が悪い… この男、首だけになってもまだあたしたちに口出しするだなんて。」(ヨカナーンの首の乗った盆をひっくり返す)

(召使に) 「早く。これをどこか外に持って行って、ハゲタカのいる荒れ野にでも捨ててきて。」

召使い 「お妃様の仰せの通りに。」

ヘロディアス 「サロメを見張りなさい。あの娘が、何一つ持ち出さないように見張るのよ。」

召使い

「お妃様の仰せの通りにいたします。」

ヘロディアス

「あははは。あの娘はわたしの娘。あたしから離れて何処にも行けはしないさ。あの娘が威張れるのは家来や母親の前でだけ。臆病なところがフィリッポスにそっくりさ。なんて子供っぽい。

もっと逆らって御覧なさいな。母親の言うことを聞く以外にどんな方法もないってこと、思い知らせてあげる。あはははは。」

4. 第四幕 ヨカナーンの埋葬

ヨカナーンの遺体を担いだ弟子たちが列になって歩いていく。

(朗読)

荒野と、乾いた地とはたのしみ、

砂漠には花咲き、かつ喜びに楽しみ、かつ歌う。

あなた方は弱った手を強くし、

よろめく膝を健やかにせよ。

心おののく者に言え、

強くあれ、恐れてはならない。

見よ、あなた方の神は報復を持って臨み、神の報いを持ってこられる。

神は来て、あなた方を救われると。

「イザヤ 35 1-4」

すすり泣く行列

行列の中に粗末な布を被ったサロメが居る。

幕